

東北中世史を書き換える 聖寿寺館跡

室町・戦国時代（15世紀前半～16世紀前半）、北東北で最大の勢力を誇った三戸南部氏の居館があった場所が「聖寿寺館跡」です。聖寿寺館は奥州街道と鹿角街道の合流点近くに築かれ、館の東側の堀底は奥州街道として利用されました。さらに南側には馬淵川が流れ、水

陸両交通の要衝に立地していたことが分かります。第24代当主・南部晴政治世の天文8年（1539）、家臣の放火により焼失し、居城は三戸、福岡、盛岡へと移りました。南部町では平成5年（1993）から聖寿寺館跡の発掘調査を開始し、三戸南部氏の強大な勢力を示す遺構や遺物が次々と発見されています。中でも令和2年度（2020）の調査では、従来の想定を覆す大発見が相次ぎ、

シビックプライド

『花は山、人は里』を訪ねて

②

南部地区／南部町の ルーツが眠る



奥州街道と八戸街道の分岐「追分石」



聖寿寺館跡をガイドする坂本瑞男さん（達者達人／南部屋形聖寿寺館ガイドの会会長）



正寿寺にある南部利康霊屋（国重文）



「歴史の道100選」に選ばれた奥州街道

祝祭の場「畑福」と 恵光院

新たな歴史の解明に関心が寄せられています。「南部屋形聖寿寺館ガイドの会」会長の坂本瑞男さんは、「教科書には載っていない三戸南部氏の暮らしや繁栄ぶりを知ってもらいたいのです。そして、次の世代にその誇りを伝えることも、我々の使命だと思っています」と力を込めます。町では地域の小学生を対象とした体験発掘や奥州街道ウォーク、研究者を招いて郷土の歴史や伝統・文化を学ぶ講座を開催するなど、貴重な歴史遺産の保護や継承、町の魅力発信につながる取り組みも積極的に行われています。

霊峰・名久井岳を間近に望む南部町には、山岳信仰が根づいています。古くから農業が

盛んなこの地では、山は豊かな恵みをもたらす一方、自然の脅威でもありました。そして、山に宿る神を鎮めるため、神祭は欠かせないものでした。

『南部町史』に、興味深い記述があります。「畑福（ハタフク）」という名の場所が複数存在し、いずれも恵まれた農地であること、「畑福」は「旗鉾（ハタホコ）」とも言い、神を招く目印となるハタを、ホコ（棒の古語）の先端に結びつけ、それを立てて神事を行ったことから、祭をした場所を示しているのです。

大向字長谷の「畑福」は、名久井岳北西の中腹にある恵光院（けいこういん）のかつての寺領地。恵光院は盛岡に移転した長谷寺の跡地に残り、堂宇や寺宝などを引き継いだことから、地域では長谷寺の通称で呼ばれています。ここには平安時代末から鎌倉時代初期の作とみられる長谷十二面観音像と木造女神坐像があり、青森県



重宝彫刻に指定されています。

恵光院を訪ねたところ、すぐ近くに農神様を祀る御堂があるとのこと、その場所へ。緩やかな傾斜地の畑中央に、自然石を積んだ小さな丘が造られ、その上に石の御堂が立っていました。五穀豊穡を願う人々の手によって信仰は脈々と受け継がれ、大切に祀られています。

「馬の里」から 「菊の里」へ

古くから馬の産地として有名だった南部地方。江戸時代には南部九牧と呼ばれる9つの藩営牧場が設置され、馬産が盛んに行われました。南部九牧の二つ「相内野」は、南部地区の北東部、相内地区の山中にあり、精鋭高級馬約40頭前後を管理していました。適度な傾斜は、健康で丈夫な馬を育てるのに適してい



恵光院木造女神坐像（県重宝）



長谷の「畑福」にある農神様を祀る石の御堂

たことでしょう。現在は山林になっていますが、牧野を囲む土塁や堀が今も残っています。

かつて良馬を育んだ相内地区は、菊の里としても知られていました。一説によると、江戸時代に南部藩主が京都の九条家から観賞用として「阿房宮」を株分けしてもらい、南部町に植えたのが始まりと伝えられています。菊の花は霜に当たると変色するため、初霜が降りるのが他の地区より遅い相内地区で盛んに作られるようになったのです。

食用菊としての阿房宮は香りと甘みがあり、しゃきしゃきとした食感が特徴で、天ぷらやおひたしなどいろいろな料理に用いられます。生食のほか、蒸して乾燥させた干し菊もあり、一年中食べられます。近年は生産者も生産量も減少していますが、収穫される10月下旬から11月上旬には、畑の一角が黄色に彩られた風景を、所々で見ることが出来ます。



長谷ばたん園